



JACET通信

大学英語教育学会

January 2002

The Japan Association of College English Teachers

No.132

【巻頭言】

難しき哉英語教育

中国四国支部長 増田 豊

初等中等教育での落ちこぼれが社会問題化するようになってから久しいが、近年大学生の学力不足も広く話題になってきている。この学力低下は単に少子化によって大学の門戸が広がったから起こった現象ではないようだ。受験の為の詰め込み教育の弊害を取り除き、子供に「ゆとり」を与える必要があるとして、1982年の学習指導要領改訂以来進められてきた「ゆとり教育改革」が最大の要因だと多くの識者が言い、私もそうだろうと思う。小・中・高校において主要5教科の授業時間数が大幅に減少し、教育内容が大幅にカットされてしまっている。中学・高校での「英語」もまたしかりである。習得すべき語彙数は中・高合わせて2500程度に、また教えるべき文法事項も大幅に削減されている。私は、記憶力の旺盛な中学生・高校生の間にもっと多くの単語を覚えさせ、文法の基礎をしっかり詰め込むことが必要であると思う。

しかし、いかに詰め込んでみても、それが即コミュニケーション能力の涵養には繋がらない。これが日本の英語教育の特異性であり、最大の欠陥でもある。ではどうすればいいのか。私は教室の中だけでコミュニケーション能力をつけるというのは、どだい無理であると思う。外国語の習得は毎週数時間、それも多人数のマルチレベル・クラスでの学習で習得できるほど易しいものではない。それに、

いくら実用、実用と叫ばれても、ほとんどの学習者には本当の実用の場は無いのである。実用の無いところで実用英語の訓練をするのは、「畳の上の水練」に等しい。

さて、2003年度より小学校に英語教育が導入される。強制ではないものの、4年生からほとんどの小学校で英語が教えられることになりそうだ。文部省のねらい通り「英語はおもしろい」との動機付けにでもなればいいが、ゆとり教育を謳いながら、さらに教育負荷をかけて、むしろ落ちこぼれを増やすばかりに終わるのではないかと心配する。しかし一方では、もっと積極的に、早期教育こそ語学習得の鍵であるとして、英語を小学校の必修科目にすべきとの主張もある。これに対して、「そんなことをすれば不毛な英語教育の期間を延長するだけ」と云うきつい意見も聞かれる。

仮に小学校からの必修科目にするとして、まず誰が教えるのかの大問題がある。コミュニケーション能力の獲得を目的とするのであれば、教師も英語に堪能でなければならない。母国語話者か、でなければ母国語話者に近い運用能力を有する教師が教えない限りダメだと思う。それとて実生活で使う機会がなければ早期教育の成果はほとんど残らないということは経験的に明らかである。とすれば、英語の歌や、多少の英単語を覚えさせるために、

そうでなくてさえ既に減らされている他教科の時間と教科内容を削って、英語の授業に当てることが果たして得策であろうか。私にはそうは思えない。

さて、翻って大学における英語教育についてはどうか。多少の例外はあるものの、残念ながら大した効果をあげていないことは、社会一般の認めるところである。先日、9月に退任された小池生夫前会長が、文部科学大臣及び中央教育審議会会長に「大学を中心とする日本の外国語教育改革の要望」を提出された。その中で、「戦後続いてきた外国語能力向上への社会や大学専門課程担当教員からの期待が大学で実現せず、大学での外国語教育の価値観を低めてしまった。これは外国語教員に責任の一端が大いにある。外国語教員の存在価値まで問われてきている。」と嘆じておられる。いかにももっともであると認めざ

るを得ない。「英語教育の研究と改善に取り組む学会であり運動体」である JACET の使命は今一層重大である。

大学英語教育の改善は、英語教員の奮起や意識改革だけでどうにかなる問題ではないが、その改革の意識すら持たない英語教師が大学にはなお多い。その理由の一つには、大学教員の評価がほとんど研究業績のみによって行われてきたという現実がある。大学教員の果たすべき義務として教育・研究、管理、社会奉仕等が挙げられるが、研究に関する業績以外はあまり問われない傾向がある。特に最初にくるべき教育については、具体的な評価基準の作成が困難である故に等閑視されがちである。これからは、特に語学教師の場合、教育能力と実践的能力を重視した評価がおこなわれるべきであると思う。

【年頭所感】

新年あけましておめでとうございます。

今年が会員の皆さまにとって

明るく平和で実りの多い年になるよう心からお祈り申し上げます。

会長 田辺 洋二

2002 年は「総合的な学習の時間」が始まる年で小学校にも英語が来る。1992 年以来進められてきた「研究開発学校」も延べ 80 校以上になり、かなりノウハウも出てきた。この状況下で、我々大学の英語教師は日本の英語教育のためになにをすべきなのか。

昨年(2001)の1月に出た文部科学省の『英語指導方法等改善の推進に関する懇談会報告』には、日本国民が身に付けるべき英語力と英語教育のあり方が示されている。これは紛れもなく今後の日本の英語教育の基本方針である。大学英語教育の課題と改善方策については、小池生夫前会長がヒアリングで意見を求められた。その結果として 1.5 ページにわたる方針が示されている。

同『報告』に示されている趣旨は、まず、「国際化、グローバル化の進展」の中で、「英語でコミュニケーションが可能な人材の裾野を国民的規模で広げること」の必要性を述べる。我々はさらに英語の大衆化を図らなけれ

ばならない。英語に慣れさせ、英語の感覚を身に付けさせることが必要だ。現在のサッカーブームを考えてみればいい。裾野が広がった結果がこれである。大学でいきなりしごいてもよいプレイヤーはできない。英語も小学校教育にお金をかけ、ブームを起こさなければ大学生や社会人に使い手は育たない。小学校で、予算を持つ正課としてたっぷり英語を聞かせれば、後に自分の分野で自由に英語で討論する大学生は十分育つはずだ。その時には、大学での初級英会話の授業は不要になるし、入試の英語も変わるだろう。大学レベルの英語の性格が明瞭になるはずである。これは、広い裾野の上に適性ある人材を豊富に含む正三角形の英語人口の姿である。

同『報告』はまさに、この正三角形の状況を英語教育に期待している。「大学は高等学校以下における英語教育を踏まえ、専門分野に必要な英語力や国際的に活躍する人材などに求められる英語力などの高度なコミュニケ

ーション能力を身に付けさせる責務を担っている」とする。しかし、大衆性と専門性という相対立する性質は現状のような逆三角形の構造では包含できない。初等教育から高等教育までを見据えた「構造改革」が必要だ。

また、もう一方で、「国際社会で知的リーダーシップを発揮することができるような人材を養成」することが「大学が担うべき重要な役割」であるとする。これ自体は、大衆化の中から優れたエリートを作り出す作業であり、日本では戦前からやってきたので、割合に慣れている。しかし、今もうまく行っているのか。高校進学率が60%弱であった40年前には自然にこの推移に入ったが、94%を越えた20年前からは、大衆教育との矛盾が吹き出てきた。中学生のほとんどが高校生になり、その内の2人に1人が大学に上がる。裾野であった大衆教育が高等教育まで上がり、すべてが裾野の状態にある。その結果、難解な入試英語が存在する一方で、入門の英語会話が重要な大学生が増えている。教育の大衆

化は結構なのだが、中等教育と高等教育にレベルの整理が必要だ。

この状況で苦しむのは中等教育の方である。大学受験準備と学習指導要領の内容との狭間で動きが取れなくなっている。そこで悩んだ生徒が、大学でも満足できずに苦しんでいる。我々も、大衆教育とエリート養成教育の両立に苦しんでいる。教育の鍵を握る高等教育が、もう一度、初等中等教育の立場で考えるべきなのであろう。

JACET 会員はすべて高いコミュニケーション能力を具えた英語教師であり、大衆教育とエリート教育を両立できる人々である。しかも、知見を持つ。高等教育と中等教育の英語の質的な分離と実行の方略を練ってほしい。高等教育で花を咲かせるために、中等教育を正しい軌道に乗せることが必要だ。その一環で小学校教育も考えられる。大学入試の内容も同じであらう。我々はこの課題に関してさまざまな活動を起こさねばならない。

事務局より

代表幹事 小林 ひろみ

2001年度の住所録を11月に発送いたしました。ご確認ください。住所等を変更される場合は、事務局にもお知らせ下さるようお願いいたします。

事務局では、リサーチのための問い合わせなどもあるため、JACETの活動記録の整理をはじめています。手始めに、これまでの役員のリスト作成等を開始しましたが、名誉会員の中には転居先が不明になっている先生もおられますので、もし現住所等をご存知であれば、恐れ入りますが事務局までお知らせください。

電子通信の分野でソフトウェア開発の経験がある保坂佳代子さんが、大浜光子さんの後任として週1回勤務します。

支部便り

<北海道支部>

1. 第6回 JACET 北海道支部運営委員会

日時：12月8日（土）15:00-17:00

場所：北海道大

議題：JACET 北海道支部15周年記念論文集の発行について了承された。また、特別補助費の使途、第4回研究例会の開催、2002年度支部大会の開催、2002年度北海道支部運営体制について審議された。異動に伴い運営委員の大場浩正先生の退任が了承された。

2. 予定

1) ニュースレターの発行

JACET 北海道支部ニュースレター第15号を、2002年3月発行をめざして準備を進めている。JACET 全国大会の特集号となる予定である。

2) JACET 北海道支部 15 周年記念論文集の発行

第 6 回運営委員会で 15 周年記念論文集の発行が了承され、編集委員会が組織された。2002 年 6 月発行をめざして、準備が進められている。

(河合靖・北海道大)

<東北支部>

11 月例会

日時：11 月 10 日 (土) 14:00-17:00

場所：東北学院大

研究発表：

(1) 伊関敏之 (鶴岡工業高専) 「Non-Native Speakers のイントネーション」

(2) 松井秀親 (米沢女子短大) 「可算名詞複数形の総称用法を考える」

12 月例会

日時：12 月 8 日 (土) 14:30-17:00

場所：東北学院大

シンポジウム：「早期英語教育の問題と展望」

司会：石浜博之 (聖霊女子短大)

パネリスト：石浜博之 (聖霊女子短大)、ジョン・サーロー (聖霊女子短大)、鈴木廣司 (秋田市土崎小学校校長)、後藤淳子 (山形市立第十小学校教諭)

12 月例会では、早期英語教育研究会 (代表：石浜博之聖霊女子短大) が中心となって、小学校での英語教育実践に関わるパネリストとともに、早期英語教育の課題と今後の展望を議論した。詳細は東北支部通信第 23 号 (2002 年 2 月発行) に掲載予定。

12 月役員会

日時：12 月 8 日 (土) 12:00-14:00

場所：東北学院大

議題：将来構想委員会案、来年度活動計画 (他の支部との合同活動など)、2003 年度全国大会開催候補地 (継続審議)、その他

(村野井仁・東北学院大)

<中部支部>

第 4 回中部支部役員会

日時：10 月 6 日 (土) 13:30-15:00

場所：南山短大

議題：1 講演会

2 2002 年度支部大会

第 5 回中部支部役員会

日時：11 月 17 日 (土) 13:30-15:00

場所：中京大

議題：1 談話会

2 講演会

3 来年度の役員

4 2002 年度支部大会

5 将来構想

第 6 回中部支部役員会

日時：12 月 15 日 (土) 14:00-15:00

場所：中京大

議題：1 来年度の役員

2 2002 年度支部大会

3 将来構想

4 JACET 賞委員会

5 研究費配分

役員選考委員会

日時：11 月 17 日 (土) 12:30-13:30

場所：中京大

議題：2002 年度役員について

講演会 1

日時：10 月 6 日 (土) 15:00-16:30

場所：南山短大

講演者：本名信行 (青山学院大)

演題：「英語の普及と変遷：アジアの中」

南山短大外国語研究センター主催・JACET 中部支部共催

講演会 2

日時：10 月 20 日 (土) 15:00-17:00

場所：中京大

講演者：Ronald Wardhaugh

(元トロント大教授)

演題：「Is There an Applied Sociolinguistics?」

談話会

日時：12月15日（土）15:00-17:00

場所：中京大

発表者1：ESP研究会

滝川桂子（名古屋文理短大）

テーマ：「ESPの現状と今後の展開－栄養士養成施設での試み－」

発表者2：西村徹哉（中京大非常勤講師）

テーマ：「Topic Development in Student's E-mail Writing」
（後藤いく子・東海女子短大）

<関西支部>

関西支部秋季大会

日時：10月13日（土）

場所：京都府立大

1) ワークショップ：「学習者の能動性と批判的思考を引き出す教材の開発－ライティング教材の場合－」

JACET関西支部・教材開発研究会

2) 実践報告：「タスクとペア（グループ）ランダム制を活用したスピーキング指導」

川村一代（関西外国語大学短大）

3) 研究発表：「going -ing 構文の語法解説に再考を－ go working [studying] は『まれ』、不可か？－」

日比野日出雄（元金欄短期大）

4) 研究発表：「スイス（Switzerland）の外国語教育」 林桂子（和歌山大）

5) 講演：「アイロニーの統合理論に向けて」
河上誓作（大阪大）

京都セミナー

日時：11月17日（土）、18日（日）

場所：国立京都国際会館

テーマ：文学の言語

招聘教授：Mick Short（英語文体論）

Short 教授による二つの特別講演：

(1) 「文学言語の分析」

Stylistic analysis の概念を literary criticism との比較を交えて、foregrounding, linguistic deviation, linguistic parallelism の観点から解説。また、文学の text からの抜粋によって具体的に分析。下記17日の1) 参照。

(2) 「コーパス文体論」

literary と non-literary narrative の corpus

stylistics について corpus linguistics との違い、speech, writing, thought に区別した discourse presentation scale、portmanteau tags, faithfulness in the written report 等々の観点から解説。また、fiction, newspaper, biography それぞれについて serious なものと popular なものの違いを narration, narrator's report of speech, direct speech, indirect speech, free indirect speech 等の項目によって説明。下記18日の2) 参照。

11月17日

1) 'Who is Stylistics?'

Prof. Mick Short (University of Lancaster, UK)

2) 'Diachronic Analysis of Narrative Discourse'

Associate Prof. Yoshifumi Saito (University of Tokyo)

3) 'The Style and Metre of Middle English Alliterative Poetry'

Ms. Noriko Inoue (University of Bristol, UK)

4) 'A Paradox of "Real" Speech in Literary Discourse'

Prof. Masanori Toyota (Kansai-gaidai University)

11月18日

1) 'Some Aspects of the Dialogue in "What Is That Sound?" by W.H. Auden'

Ms. Nozomi Hayashi (Kyoto University)

2) 'Corpus Stylistics: Speech, Thought and Writing Presentation'

Prof. Mick Short (University of Lancaster, UK)

3) 'A Literary Text as an Educational Foundation'

Prof. Akira Kawabata (Ashiya University)

4) 'Stylistics as Language Awareness: Linking Language and Literature'

Ms. Barbara Hyde (Ritsumeikan University)

5) Round-Table Discussion: 'Language, Literature and Education'（全発表者）

講演会

日時：11月22日（木）18:00-22:00

場所：芝蘭会館

講演：1) 'Issues and Priorities in Teaching English Pronunciation'

Barbara Bradford (SOAS ロンドン大学)

Target setting, individualizing teaching, handling affective factors, methods of teaching について解説。日本人学習者を教える際に役立つ consonants, vowels, rhythm のリストを紹介。

2) 'Helping Japanese EFL Learners Improve Their Pronunciation - using Oxford Dictionary of Pronunciation [ODP] (2001)'

島岡丘（茨木キリスト教大教授、英語発音表

記学会会長)

学習者を助ける具体的な方法を多くの例を挙げて解説。英語の発音のカタカナ表記法を紹介。

(東眞須美・神戸芸術工科大、時岡ゆかり・大阪産業大)

<九州・沖縄支部>

Executive Committee Meetings

1. June 30, 2001, Seinan Gakuin Univ., 10:30-15:00

Discussed publication of the journal, plans for inviting Dr. Richard J. Towell (Salford Univ., UK) to the annual fall lecture, plans for the annual conference in October, and exchanged views on the future of JACET.

2. July 21, 2001, Seinan Gakuin Univ., 10:30-15:00

Continued discussion on the journal and the future of JACET, and reviewed proposals submitted for the annual conference.

3. August 25, 2001, Seinan Gakuin Univ., 13:00-16:00

Continued discussion on the journal and the annual conference, discussed the first meeting of the "Classroom-Centered English Teaching" SIG, and the development of the Chapter's Website.

4. October 12, 2001, Nagasaki Hotel Grande Mer, 18:00-19:00

Discussed final preparations for the conference, the general business meeting, the first "Classroom-Centered English Teaching" SIG meeting, and the annual fall lecture.

Recent Chapter Activities

(3) Annual Conference

The annual conference was held on October 13, 2001 at Nagasaki Junshin Catholic University under the theme "English Education in Transition." The conference had four parallel sessions in the morning, in which 15 papers were presented. A special lecture by Dr. Ahn Jung-Hun (Pusan National Univ.), entitled "A Proposal for English

as an Official Language in Korea" and a symposium entitled "Suggestions for Reforming University-Level English Education" were held in the afternoon. JACET President Tanabe Yoji (Waseda Univ.) was a special guest at the conference. Representatives from YETA (Yongnam English Teachers' Association), the Chapter's sister organization in South Korea, were Dr. Ahn Jung-Hun (Pusan National Univ.), and Dr. Kang Hoo-Dong (Sungsim College of Foreign Language, Pusan). Details on the conference are available at <http://www.n-junshin.ac.jp/jacet/ACprogram.htm>. A general business meeting was after lunch.

(4) Annual Fall Lecture

In cooperation with the Kyushu Chapter of LET, the annual fall lecture featuring Dr. Richard J. Towell, Head of School of Languages, Salford Univ., U.K., was held on November 11 at Seinan Gakuin Univ. Entitled "The Role of Language Teaching in Higher Education," Dr. Towell's lecture focused on the changing position of foreign language education in higher education, with particular reference to the situation in U.K. A reception for Dr. Towell followed the lecture.

(5) Chapter Website

The Chapter has begun development of a Website (<http://www.n-junshin.ac.jp/jacet/>). Currently, the site contains information on the annual conference.

News from Chapter SIGs

New "Classroom-Centered English Teaching" Special Interest Group

This year, the Chapter opened its fourth special interest group entitled "Classroom-Centered English Teaching." The group is devoted to building bridges among teachers of English at all levels and will focus on studying classroom activities, teaching plans, teaching materials from a practical point of view. The group welcomes participation from elementary, junior high school, and high school English teachers. On October 14, the day after the conference, the first meeting of the SIG was held at Nagasaki Junshin Women's High School under the theme "The Role of English Phonetics Instruction in Developing Communicative Competence." To commemorate this special event, JACET President Tanabe Yoji (Waseda Univ.) was invited to give the opening

lecture under the title "Making Instruction in English Phonetic Instruction Useful in the Classroom." Prof. Takei Takayoshi (Seinan Gakuin Univ.) taught a class entitled "Approaches and Examples for Teaching Practical Communication." The meeting concluded with a forum entitled "How Should English Education Advance in the 21st Century?" For more information on the SIG, please contact Kanamori Tsuyoshi (Nagasaki Wesleyan Junior College) at kanamori@nwjc.ac.jp.
(Robert J. Fouser, Kagoshima Univ.)

月例研究会報告

10月6日(土) 14:30-17:00

東京電機大 7号館 7401

Joseph Benson (東海大)
"Flexible Teaching through Computers"

Joan McConnell (Text writer)
"World English and English Education for the 21st Century"

Prof. Joseph Benson gave a talk on Flexible Teaching through Computers and suggested some ways that computers can be used in language teaching. Dr. Joan McConnell discussed the role of World English and offered some suggestions about English Education in the 21st Century. Both speakers also dealt with communication in English mainly from students' viewpoints.

(中村優治・東京経済大)

特別講演

10月27日(土) 14:30-17:00

東京電機大 7号館 7401

Ronald Wardhaugh (前 Toronto University)
"Is there an applied sociolinguistics?"

Professor Wardhaugh gave us the following speech. A review of applications of sociolinguistics produces interesting findings. Variationist sociolinguistics has produced few applications but considerable controversy over matters concerning accent and dialect. Gender studies confused by the language-culture relationship have produced largely contradictory suggestions. Issues of language planning and spread tend to be settled ideologically rather than

linguistically. Finally, "critical" studies are thoroughly ideological and only borderline sociolinguistic.

(長谷川瑞穂・東洋学園大)

11月17日(土) 16:00-18:00

早稲田大学 16号館 大会議室

永田博人 (日本大)、**浜岡美郎** (早稲田大)
「大学入試読解問題の質的分析」

既に、入試問題の良し悪しについては以前からかなりの数の書物が出され、特に読解問題の一形式である「総合問題」出題の是非が繰り返して議論され批判されてきている(例えば、「これでいいのか大学入試英語」、「無責任なテストがおちこぼれを作る」など)。にもかかわらず、今回分析した2001年度国公立英語入試問題の多くに未だにこの形式が残っていた。そもそも長文読解問題出題の主眼は内容真偽と指示語の照応関係を問う事であるべきだ、というのが批判の根拠であるが、長文の内容とは全く関係の無い設問が多いのには驚かされた。また、解答の際受験生には高度過ぎるとされる程の専門的背景知識を必要とする問題、抽象度の高い問題なども散見された。研究会では、読解問題作成の際に留意すべき出題形式・本文内容・設問形式・選択肢等に関するチェックリストを提案、その内容を検討するとともに、既に作られた問題の「偏り」をジャンル・トピック・テキストタイプ・設問形式などの観点からチェックする簡易分析表を提案した。最後に、韓国「大学修学能力試験」を例に、様々なテキストタイプを用いながらその文章のポイントを問えるような出題方法への一つのヒントを提示した。(永田博人)

読解問題分析の必要項目を、長文問題が評価できる能力、入試問題の評価内容、長文読解問題である必要性、形式・構造、の4点より概観し、大学の入試問題を分析した。読解問題の評価項目として Types of Reading Assessed、Types of Meaning Assessed、また Type of Comprehension Skill Assessed をあげた。また、別観点として、文脈の中での語の意味の理解、短文の意味の理解、パラグラフまたは長文の理解、読解の質問の型(直接言及、推論、想定、評価)、評価の観点(必要な情報だけを求めるとばし読み、粗筋・概要の把握力、要点の把握力、論理的推理力、読み物の

価値や表現法の効果、社会文化的意味、情報を得るスピード)を取り上げ、形式上の観点として客観テスト択一式問題構成の基本を紹介した。分析した結果をまとめると、1.解答するために長文を必要としないものがある 2.和、英訳問題は当該部分のみで訳すことができるものがある 3.総合問題形式をとるものがいまだにある 4.テキスト以外の背景知識を必要とするものもある、が読解問題として適切なものを概ね3分の1程度含んでいる、と言えよう。(濱岡美郎)

情報交換会より

韓国と中国の大学入試制度について

韓国ソウル市内にある韓国教育課程評価院において開催(2001.8.21)された「日中韓大学入試国際セミナー」(International Seminar on the College Entrance Examination; Comparative Studies of Korea, China and Japan)に参加する機会を得たので、韓国の大学入試制度改革と中国の入試制度について報告する。

☆中国の入試制度

高等教育は4年制大学と専門大学があり、2000年度の大学入学試験受験者は約3,600,000人である。この内61%にあたる約2,200,000人が入学を許可された。受験者の男女の比率は6対4であり、現役と浪人の比率は約7対3であった。2001年度の受験者は約3,800,000人、入学許可者は約2,500,000人、大都市東部出身者がその内70%以上を占めている。

次に最近2ヵ年の大学入試科目については、入試制度は3+Xで、3というのは国語、数学、外国語(英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、日本語)、Xというのは物理、化学、生物、政治、歴史、地理、6科総合、文科総合(政治、歴史、地理)、理科総合(物理、化学、生物)のうちから1または2科を選択する(一般的には2科)。2001年は13省で3+2で行われ、2は2つのタイプからなり、文科の政治と歴史、または、理科の物理と化学の試験となっている。

2001年に向けての大学入試改革の主な課題と計画については、まだ中国における高等教

育は一種のエリート教育であり、それを受けられる同年齢集団はたったの11%である。そのため大学入学生を受け入れる改善策を次のように検討中である。1)大学入試の難易度を適正にする。2)受験者の専攻との関係で入試の難易度と識別力の適正化を図る。3)試験科目については、大学入試問題の50%は選択式、または客観式問題であるが、残りの主観式問題では評価と配点に誤差が出ないようにするのに工夫と改善が必要である。

☆2002年度実施の韓国大学入学試験制度

韓国では大学入試の激しい競争から教育正常化のために入試制度改革をたびたび行ってきた。2003年から大学への入学定員が志願者数を上回り、従って、大学教育は一部選ばれた者へのエリート教育ではなくなりつつあるとの認識を示し、多くの大学が学生に対して多様な選考を導入して学生確保にあたり、その上、財政的な危機的な状況にさらされている。このようなことから、教育部は大学入試制度の改善に取り組み、大学の特性や受験者選抜の多様化で各大学の特色を出し、学生の確保に努めようとしている。

2002年度からの大学入試制度改革は、学生募集において、1)学生募集の多様化:志願者の選考を年間通して行うが、その時期とおおよその比率は次のようになる。随時募集(40%):5月から6月までを10%、9月から12月までは約30%を選考する。さらに、幾つかの大学においては高校2年末に入学許可の予約制を導入する。定時募集(60%):12月から翌年2月までにA,B,Cグループ別を選考する。追加募集は2月に定員に空きがあった場合に行われる。2)志願者選考の基準は、現行の修学能力試験は「大学入学資格試験」に変わり、この試験成績と高校時代の学業成績、推薦書、特技、受賞歴、面談などの資料が加わることになる。各大学ではこれらの資料により学生の選考を行って入学者を決定する。来年度からの多様な入試は果たして首都ソウルにある大学への進学が緩和されるのかどうかはまた別の韓国の深刻な問題でもある。

本部情報交換会(2001.1.20)の内容の報告の予定でしたが、既に時期も経過しておりますので上記の報告に変更しましたことをご了承ください。尚、「中華人民共和国の教育事情と国際交流」についてはGlobal Perspectives

(JACET 国際理解教育研究会 2001 年論集)
の中に収録してあります。
(石川祥一・松蔭女子大)

講演会等案内

1. 言語教育国際シンポジウム 「コミュニケーションにかかわる言語能力ー テスト開発と測定・評価ー」

ライル・F・バックマン博士 (Lyle F. Bachman) (米国カリフォルニア大学ロスアンジェルス校教授) が文化庁のプログラムにより招へいされる機会に、「コミュニケーションにかかわる言語能力ーテスト開発と測定・評価ー」のテーマにより国際シンポジウムを以下により開催します。

バックマン教授は、応用言語学者として言語学分野において理論面、実践面、教育面で中心的な役割を担う一人であり、現在最も精力的に活動している研究者の一人です。

ご関心のある多くの方々の参加をお待ちしております。

日時:2002年3月21日(木・祝日)13:00-1600
会 場:学術総合センター 2階 中会議室2~4
東京都千代田区一ツ橋2-1-2

交通:営団地下鉄半蔵門線「神保町駅」、都営地下鉄新宿線・三田線「神保町駅」、営団地下鉄東西線「竹橋駅」

Lyle F. Bachman (カリフォルニア大学ロスアンジェルス校)、大坪一夫 (麗澤大)、森戸由久 (創価女子短大)、静哲人 (関西大)、庄司恵雄 (群馬大)

司会:伊東祐郎 (東京外国語大)、石川祥一 (松蔭女子大) (敬称略)

主 催 (社)日本語教育学会、国際交流基金関西国際センター、大学英語教育学会、日本言語テスト学会

参加料:1,200円 (主催学会の会員は1,000円)
参加申込:参加希望者は、(1)氏名、(2)所属先、(3)所属学会名、(4)連絡先、(5)電話番号(Fax、e-mail アドレス)を明記して、2002年3月1日(金)までに、往復はがき、Fax またはメールにより、下記あてにお申し込みください。電話での申し込みはご遠慮ください。

(社)日本語教育学会
Fax:03-5216-7552、E-mail:nkg@mb.kcom.ne.jp

○先着順に受け付け (定員 150 名)。参加希望者多数によりお断りする場合があります。
○参加料は当日会場受付で申し受けます。

2. 言語能力測定に関する講演会 「コミュニケーション能力をどう測るか: 現状と展望」

日時:2002年3月23日(土)13:30-16:00
会場:国立オリンピック記念青少年総合センター センター棟 417号室 (セミナー・ホール)

交通:営団地下鉄千代田線「代々木公園駅」、小田急線「参宮橋駅」

講師: Lyle F. Bachman

(質疑応答は通訳付き)

主催:(社)日本語教育学会、国際交流基金関西国際センター

参加料:500円

参加申込:参加希望者は、(1)氏名、(2)所属、(3)連絡先住所、(4)電話番号(Fax、e-mail アドレス)を明記して、2002年3月1日(金)までに往復はがき、Fax またはメールにより、下記あてにお申し込みください。電話での申込はご遠慮ください。

○先着順受け付け (定員 300 名)。参加申込者多数によりお断りする場合があります。○参加料は当日会場で申し受けます。

3. 言語能力測定に関するワークショップ 「テストの設計と作成」

日時:2002年3月24日(日) 10:30-16:00
会場:学術総合センター2階 中会議室2-4
〒101-0014 東京都千代田区一ツ橋2-1-2

交通:営団地下鉄半蔵門線「神保町駅」、都営地下鉄新宿線・三田線「神保町駅」、営団地下鉄東西線「竹橋駅」

ワークショップの講師:Lyle F. Bachman

内容:「テストの設計と作成ープレイスメントテストと会話テストを例にー」のテーマにより、具体例を引きながら話を進め、適宜質疑応答をささむ。

全体の趣旨は、現場の教師がテストを開発しようとするときの参考になるように、開発のプロセスをできるだけ具体的に話していただくようにする。(1)テストの作成を考える際に考えておくべきこと、知っておくべき知識を含めて、テストの概説。(2)プレイスメント

の設計と作成。(3)会話テストの設計と作成。

(質疑応答は通訳付き)

主催：(社)日本語教育学会、国際交流基金
関西国際センター

参加料：2,500 円

(日本語教育学会・大学英語教育学会・日本
言語テスト学会の会員は 2,000 円。)

参加申込：参加希望者は、(1)氏名、(2)所属、(3)
連絡先住所、(4)電話番号(Fax、e-mail アドレ
ス)を明記して、2002 年 3 月 1 日(金)まで
に往復はがき、Fax またはメールにより、下
記あてにお申し込みください。電話での申し
込みはご遠慮ください。

〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-4-1 東
方学会新館 2F (社)日本語教育学会

Fax: 03-5216-7552 E-mail:nkg@mb.kcom.ne.jp

○先着順受け付け(定員 60 名)。参加申込者
多数によりお断りする場合があります。○参加料は当日会場で申し受けます。

◆上記のすべてのお問い合わせは日本語教育
学会<Tel. 03-3262-4291>へ◆

このアンケートは英語、及び英語以外の外
国語を教えている教員の意識と教授法につい
ての調査を行うために必要なものです。3 枚
の回答が無理な場合は可能な分だけでもお戻
しくさせていただきますようお願いいたします。

実態調査委員長 見上晃

JACET 通信 No.130 訂正

p. 3 右側 下から 3 行目

(誤) 依存症 → (正) 依存性

編集：広報通信委員会

(担当理事：田中慎也、委員長：加藤忠明)
予算縮小の折、例年掲載していました研究会
活動報告を割愛いたしました。ご了承下さい。

(1月号編集担当：笹島)

お知らせ

紀要委員会より

JACET 紀要 35 号は投稿数と合格論文が少
なかったために、来年度 4 月 26 日締め切り
分の合格論文と合わせて、9 月はじめに発行
することになりましたのでお知らせいたしま
す。

紀要委員長 森戸由久

実態調査委員会より

**外国語(英語)教育に関する意識及び教
材・教授法に関する調査アンケート
至急回答ご協力お願いします。**

10 月に実態調査のお願いを致しましたが返
送されてきた回答用紙の枚数が調査に必要な
枚数の半分にもなりません。まだお手元にア
ンケートと回答用紙がお有りの方は至急ア
ンケートにお答えになり回答用紙をお戻しく
ださい。

Main Articles in This Issue

Foreword (Yutaka Masuda)	----- 1
Greetings(Yoji Tanabe)	----- 2
Report from JACET office	----- 3
Chapter News	----- 3
Monthly Meeting Reports	----- 7
Information	----- 8
Announcements, etc.	----- 9

2002 年 1 月 31 日発行©

発行者 大学英語教育学会(JACET)

代表者 田辺 洋二

発行所 〒162-0831 東京都新宿区横寺町 55

電話 03-3268-9686

FAX 03-3268-9695

<http://www.jacet.org/>

印刷所 〒228-0021 座間市緑ヶ丘 3-46-12

有限会社 タナカ企画

電話 046-251-5775